昭和三十一年に於ける国語学界の展望

総記 附国語学史

塚原鉄雄

はじめに

かって、小学校で、国史を習ったとき、素朴な疑問を抱いたことがある。当時は、尋常科の五年生と六年生とで、神代から現代に至る歴史を学んだわけだが、今から千年も後の小学生は、二ケ年で学習を終えることは、到底、不可能に違いない。天皇の諡号を暗記するだけでも、大変な負担だろう。早く生まれて来て、幸いであった。それにしても、昔の小学生は、なんと、楽だったことだ。五千年も経ったら、みじめなことになろう。

歴史というものを、質的な展開の把握であることを知らず、単なる事実の集積としか理解できなかった幼稚さ、といってしまえば、それまでである。だが、このたび、〈展望〉の執筆を依嘱されて、まず、念頭に浮んだのは、このことであった。

雑誌『国語学』が、国語学界の展望を掲載したのは、一九四九年度に始まる。爾来、一貫して、執筆者の採った立場は、研究業績を漏れなく紹介し、適宜、解説を施すことであった。このような方法は、発足当時にあっては、大いに、その意味があったと思う。それまでにも、研究業績の紹介や論文目録の作成は、ないわけではなかった。しかしながら、研究の交流は、必ずしも、スムースに行われてはいなかったし、一個人や一雑誌の調査では、遺漏を免れなかったのである。そこで、全国的な視野を具えた国語学会が、網羅主義的立場に拠って、学界の展望を試みることは、むしろ、その義務であったともいえよう。ぼくたちは、この展望から、はかり知れないほどの利益を蒙って来た。

だが、国立国語研究所が、『国語年鑑』を発行して、文献目録を収録するようになってからは、こうした記述的展望の使命は、終了したといわねばなるまい。もっとも、『国語年鑑』は、この意味で、完備しているとはいえず、注文したいことも、多々ある

が、別の機会に俟つ。

まず、展望を執筆する個人が、国語研究所に匹敵し得るほど、資料を蒐集できるかどうか、疑わしいということがある。仮りに、それが可能であるとして、『国語年鑑』の編集に重複する作業を繰りかえすだけであって、これに費される時間と労力とは、まったく無駄にちかい。また、その労を惜しまないとしても、果して、そうした作業が、《展望》の名に価するか、疑問を抱かざるを得ない。

一体、このような展望には、三つの類型があり得ると思う。第一に、どんな研究が、どこに、どんなふうに発表されたかを、逐一紹介するので、これを、《記述的展望》と名づけよう。第二は、それらの研究について、その内容を解説するもので、いわば、《解説的展望》である。第三は、展望の執筆者によって、価値づけを実施するので、《批判的展望》と呼びたい。そして、《記述的展望》と《解説的展望》とは、一括して、《批判的展望》に対する《文献的展望》と考えられる。その性質上、文献的展望は、いきおい、網羅的列挙をすることになるし、批判的展望では、厳重な選択取捨が行われる。記述的展望と解説的展望とを分ければ、解説的展望は、その中間となろう。

いうまでもなく、これらは、抽象的な類型であって、具体的な展望においては、これらの要素が混淆し、相互の占める比率の差異が認められるに過ぎない。しかし、これらが、同率であることはあり得ないし、したがって、その根柢が、どの類型に属するかは、決定できる。そこで、従来の展望を検討してみると、記述的展望に、若干の解説的展望を加味し、微小の批判的展望を臭わせたものであって、本質的には、記述的展望であった——もしくは記述的展望であろうとしたといえよう。たとえば、尨大な刊行物の数量に、託ち泣き、展望原稿の公表されたのちに、脱漏した文献を、追加することは、一再ならず行われて来た。これは、網羅的な記述的展望の志向されていたことを、顕著に証明する。

展望というものが、一面、社交的性質を免れないならば、記述的展望は、最も無難な方法に違いない。人間は、誰しも、自分の論文に、価値を認めるから、公表するのであろうし、それが、無視されれば、不満を抱かないひとは、稀であろう。対人関係が、研究活動にも、影響するところの少なくない現状からすれば、好んで敵をつくり、憎まれ役を買うのは、愚の極みである。そうした世渡りの智慧が、記述的展望を維持して来た、大きな理由のひとつであったと思われる。でなければ、《展望》ということについて、根本的な誤解が、無意識のうちに、瀰漫していたのであろう。

学界展望といっても、担当者や予想される読者の層に応じて、いろいろな《あり方》があるはずであるし、また、あってよいと思う。したがって、同じく《展望》と題しても、国語学会の機関誌『国語学』に掲載されるそれは、たとえば、『国語年鑑』のそれと、性質を、異にしなければなるまい。『国語年鑑』は、無論、専門家によって利用されることが多いであろうが、〈識者の意見や学者の研究とともに、一般の人々の声を結集する〉ものであり、〈学校図書館・国語関係者の基本図書〉として、編集されている。一方、国語学会は、〈国語研究の進展と研究者相互の連絡をはかることを目的とする〉学会であり、いわば、専門家乃至

専門家たろうとする人びとの集団である。すなわち、『国語年鑑』の展望は、必ずしも、専門家のためのものではないが、『国語学』のそれは、専門家のためのものである。したがって、前者は、批判を加味するとしても、重点は、解説的であることが望ましい。（その意味で、国語年鑑の展望欄は、スペースが、余りにも狭少である。）これに対し、『国語学』のそれは、より批判的であるべきであろう。

さきに、ぼくは、展望を記述的展望・解説的展望・批判的展望の、三つに分けた。これらは、単に、平面的に対立するものでは、決してない。漸層的な段階として、把握されるべきものである。記述的展望が完成したうえに、解説的展望が、さらに、そのうえに、批判的展望が、逐次、成立する。上位の展望からすれば、下位の展望は、《基礎作業》ということになるが、下位の展望を欠く上位の展望は、恣意的な独断に堕するに違いない。その意味で、この三つは、いずれも、疎略にできないものである。ただ、実際に展望を執筆するに当たっては、その目的に応じて、どの段階を採用するかが、決定される。

どの方法によるとしても、記述的展望は、基礎作業として、欠くことができない。しかし、既に述べたように、『国語年鑑』の文献目録が、別にあるからには、ここに重複する必要はないわけである。また、専門家を対象とするのだから、解説的方法は、多くの場合、不用となるであろう。もっとも、専門家といっても、相当に分化していることではあるし、分化はしていても、全体的な視野を持つことは、分化した専門を追求するためにも、不可欠であるから、解説的方法が、まったく無用にはなるまい。

雑誌『国語学』が、なぜ、《展望》を試みなければならないのか。国語学会の会員が、《専門家》であるとすれば、おのずから、その意義も、定まって来よう。研究が、過去の蓄積を、批判的に継承するところに、新しい発展が期待できるという、人間の営為が、《歴史性》を持つところに、その意義がある。

読者も担当者も、ともに、研究者である。したがって、展望の、焦点は、明日の研究に絞られねばならぬ。換言すれば、単に、前年度の研究を、整理し、認識するに止どまらず、そこから、何を継承し、どう展開すべきかを、徹底的に探索するとともに、それを、具体的な研究に、生かして行く資料を、提供するものでなければならない。こう考えると、『国語学』の展望は、批判的展望であるべきであり、記述的展望や解説的展望は、批判的展望を成立させるための、基礎作業に過ぎないことになる。他に、そうしたもののなかった頃は別として、今日では、記述的もしくは解説的展望に重点を置く展望は、社交的礼儀を除いて、ここには、不必要となった。

ところで、批判とか批評とかには、大別して、二つの効用があると思う。批評するものが、優越感を満足させるだけの、破壊的な批評は、既に《批評》の名に値しないから、無論、考慮の外に置く。ひとつは、浜田敦氏が、時枝誠記博士の著書を批評するに際して述べられたことだが、〈批評されるべき業績の欠陥を指摘することによって、著者に反省を求め、誤った点を是正して、より完全な学説をつくりあげることに役立てる〉ことである。これは、一般に、批評の効用として、理解されているところであろう。たとえば、《作家》に対して、《批評家》乃至《評論家》の

存在する意義は、主としてここにある。これを、ぼくは、仮りに、《批評されるもののための批評》と呼んでいる。この場合、批評は、批評されたものによって、実践的に答えられねばならない。

いまひとつは、《批評するもののための批評》と、名づけてよいものである。批評は、ただに、批評を受けたものにだけ効用のあるものではなくて、批評するもの自体の実践に効用がある。時には、批評を受けたものには、全然、効用がなくて、批評するものにだけ、効用のあることがある。いずれにしても、批評するものに、焦点のおかれる批評である。たとえば、歴史に対する批評など、その典型であろう。

雑誌『国語学』の展望は、担当者も、読者も、ともに、実践的な研究者であって、《国語学評論家》であろうと志しているひとは、少なくとも主観的には、ないはずである。とすれば、ここに試みられる展望が、批判的展望でなければならないとして、その批判が、《批判されるもの》のためにではなくて、《批判するもの》のためでなければならないということになる。

そこで、《批判するもののための批判》について、考えてみたい。もし、《批判するもの》が、単なる展望の担当者という個人を指すのであれば、そうした展望は、その書斎を出る価値を持たないといえよう。批判の規準は、学界の研究状態に対する認識、および、それに立脚する研究方向についての洞察でなければならない。そうした研究の〈かくある〉と〈かくあるべき〉との見識が、《批判するもののための批判》をして、《学界のための批判》であらしめる。その意味で、展望を担当することは、《現代史》を執筆することである。すなわち、担当者は、国語学史に対する《史観》を持たなければ、展望を担当することはできない。この場合、《史》というのは、いうまでもなく、現在は、過去の発展であり、過去と現在の展開として、未来を将来として位置づけ得るという、科学的な歴史である。

ところで、史観というものは、立場によって異る。万人を満足させる史観は、現実の問題として、存在しないであろう。ぼくは、ぼく自身のそれに拠って、筆を執るより、途がないわけである。したがって、究極において、《主観的》であり、《思弁的》であるという誇りを、免れまい。しかし、それは、素材的な記述的展望を脱して、解説的、更に、批判的展望に進むにつれて、避け得ないことではある。が、そのためにこそ、《批判されるもの》のためよりも、《批判するもの》のための展望が、より意味をもち、また、この展望が、個人の署名による責任を明記して、公表される必要がある。

もし、展望が、純粋な客観的立場に拠れるのであれば、『国語学』に掲載する場合、国語学会の仕事であるとして、担当者の固有名詞を明示することはない。だが、展望というものも、やはり、《研究》であり、個人の責任を避けられぬ。だから、異った人びとによって、異った展望が、数多くなされてよいわけである。記述的展望においてさえ、国語学的業績と認めるかどうか、どう類別するか、といったことで、異った見解が、生ずるに相違ない。解説的展望となれば、論旨の把みかただけでも、多様性を免れまい。まして、批判的展望ともなれば、まず、対象の設定―素材の取捨裁量において、異見が、夥しく現われよう。したがって、批判的展望は、また、批判の材料を提供するものである。そ

して、そうした批判と反批判とが、建設的になされるときに、研究の新しい発展方向が、万人のものとして、開拓されるに相違ない。

さて、《展望》の〈あり方〉が、このようなものであるとして、その担当者に、適不適のあることは、否定できないであろう。ぼく自身は、甚だ不適格なひとりである。

第一に、ぼくの非社交性がある。数年前に、東京の懇親会の席上で、発言を指名された。突然だったせいもあるが、〈何もありません〉と一言、司会者の好意を無にしてしまったことがある。今だに、同席した某女史から、事あるごとにナジられて、困惑するが、思ったことしかいえず、思わないことはいえない阿呆である。ぼくが、批判的展望を試みるからには、選択を厳しくして、多くの業績を無視するに違いない。当然、独善的な処置として、非難や攻撃、不平や不満の声は、天下に充満するであろう。数年前の後味が、いまだによくないことからすれば、今度は、生涯タタルかも知れない。ぼくも人間のうちだから、憎まれるよりは、憎まれない方を好む。好んで敵を作ることの愚は、避けるにこしたことはない。

こうした予想――それは、従来の展望や書評類のあり方、および、それらに対する批判とか感想から、十分に推測できる――にも拘らず、この展望を引き受けたのには、理由のないわけでもない。そうした悪口が生ずるには、批評するものの態度なり方法なりに、責任もある。しかし、また、根本的には、批評を受ける側や、これを傍観して批判する側にも、批判され、克服されねばならない欠陥が、やはり、あったのではないか。批判が、学問的な方法のそれ――方法論的批判に堪え得ないものもあったけれども――に対してでなく、いたずらに、破壊的な罵倒か、揚げ足とりをすることの少なくなかったことは、否定できない。しかし、批判を受ける側にしても、第三者にしても、学術的な批判を人間的な悪口にスリカエて、理解する傾向が、多分にあった。そのために、多くの批評は、方法論的なそれを回避して、著者の労力を讃美し、末梢的な欠陥を指摘し、著者を傷つけない範囲で、批評するものの見識を示す傾向が、強いように思われる。約言すれば、学界の前近代性が、《批判》や《批評》を、近代化させなかったといえよう。そのために、批評者に対する個人批判は、盛んにささやかれるけれども、批評そのものに対する反批評は、極めて例外的な少数の場合を除いて、殆んど見られなかった。こういった状況では、本質的な方法論的批判を試みようとすれば、沈黙するのが、最も賢明な処置ということになる。（無論、末梢的な誤謬を指摘し、これを訂正することも、必要ではある。しかし、それが、学術的な業績であり、学術的な見地から批判しようとするのであれば、方法論的批判に立脚するものでなければなるまい。）

ところが、こうした学界の前近代性は、漸く、解消されようとしている。殊に、新進の、いわば研究者のタマゴの中に、前近代性に対する鋭い批判の眼を注いで、これを克服しようとする意欲に燃えているひとが、次第に増してきたように思われる。年輩者にとっては、特定の個人的な希望であった近代化が、ひとつの気運として、生じて来つつある。これが一般的に実現するのは、ぼくなどが老朽化してからだろうが、そうした萌しの発生は、確認してよかろう。そこで、ぼくが、ここに、従来からすれば、特

異な展望を試みるとしても、かれらは、それ自体を、ひとつの見解として、学的立場から、批判してくれそうに思う。かれらは、まだ、数も少ないし、未熟で、学界に対する力も、無にひとしいけれども、明後日の国語学を背負って立つべき鳳雛である。こうした新しい見識をもつ世代の出現が、不適格を自認しながらも、《展望》を引き受けさせた、ひとつの理由である。

ぼくの不適格な、第二の条件として、興味の偏向ということがある。ぼくも、学生時代には——刊行物の少なかったせいもあるが——、友人たちに比して、読書範囲は、むしろ、広い方であった。国語学とは、どんな学問か、どんな研究分野があって、どんなふうに研究されているのか、問題点は、どこにあるか、自分のなすべきことは何か、——こうした模索は、研究のために必要であったばかりでなく、もともと好きではいった道だから、興味をもって、文献を、広く漁ったのである。ところが、三十歳を過ぎて、自己の方向と限界とが、漠然とながらも、規定されるようになると、自分の研究に、直接もしくは間接の栄養を与えるものを除いては、殆んど読まなくなった。それでも、寄贈を受けたものは、好意に報いる意味で、読むけれども、自己の研究や興味以外のものを、積極的に博捜して、熟読する根気と時間とを、失ってしまったのである。現に、この展望を担当することになって、泥縄式に読んだ論文も少なくないし、未知の業績を教示してもらったこともある。こんな人間が、展望を担当するということ自体、既にオコガマシイといわねばならぬ。辞退すべきであったかも知れない。

だが、この点に関しても、二つの理由から、引き受けても、差支えないように思った。第一に、業績のすべてを読破したところで、全部に亘って、万遍のない一貫した理解と批判が、果して可能か、ということである。自己を以て、他を推しはかる尊大の誇りは、甘んじて受ける。しかし、誰が担当するとしても、純然たる批評家であることはない。誰しも、研究を実践するものであって、それぞれ、自己の研究に規制された規準を、持っているはずである。理解なり、批判なりは、究極的に、この壕から、出ることはできないであろう。純然たる批評家にしても、絶対普遍の規準を持っているはずはない。もし、持っておれば、却って、批評家であることを、否認することになる。批評の規準なり原理なりは、所詮、相対的であることを、免れぬからである。一方、研究者であるぼくが、ある論文は読み、ある論文は読まない、という選択を試みるのは、既に、批判をしていることになる。読まないで、批判をしているなどとは、八イイ気ナモノダ〳〵と嘲笑されよう。けれども、不完全な読みしかできないで、全部に目を通すのと、客観的にいえば、五十歩と百歩との相違があるに過ぎまい。五十歩と百歩との間には、差異があるともいえよう。しかし、それは、量的な差異に止どまって、質的なものではない。

批判的展望においては、質的な差異は、重要だが、量的なそれは、さして、重視する必要がない。もっとも、量が莫大になれば、質に転換するが、ぼくも、それほど、怠慢ではないつもりである。なぜ、量的な差異が、それほど重要ではないのか、——これが、第二の理由になる。

ぼくは、展望のあり方を、三つに分けて、『国語学』の展望は解説的展望を加味した批判的展望であるべきだと考えた。そし

て、昨年度の国語学界は、どうであったかという認識が、今年以後の発展を、どんなふうに胎んでいるかという洞察に、結びつくべきであると説いた。この場合、個々の業績は、材料を提供するけれども、展望の直接的な対象となるのではない。それらの業績に具体化されている学界の潮流が、対象化されねばならぬ。個々の業績は、具体的なものとして存在するが、この潮流を把握させる素材でしかないのである。したがって、対象化された潮流に、矛盾しない限り、読まない業績があっても、支障を生じないわけである。

いささか冗長な前書きとなったが、従来の慣行を無視した展望を試みようとするに際して、ぼく自身の見解を、述べておく。さきにも触れたように、いろいろな立場から、さまざまの方法によって、展望がなされてよいはずである。ぼくの方法に対する非難が、感情的な不平としてではなく、方法的な批判として向けられることを、切に期待する。でなければ、研究者として、自殺行為に斉しく、また、学界は、閉鎖的な職人の懇親会を、一歩も出ないことになろう。

総記

まず、安田徳太郎氏の『万葉集の謎』を廻ぐる《騒動》から、筆を起こしたい。この騒動は、見方によっては、単なる茶番として、片づけることもできよう。しかしながら、ぼくたちのあり方について、多くの反省を与える。

池上禎造氏が、『国語年鑑』の展望で、触れられたように、マス・コミュニケーションの力を、今更のように認識させられたこと、言語に対する一般の常識程度を考えさせたことは、いうまでもない。更に、国語研究に携るものとして、こういうことも、考慮すべきではあるまいか。ひとつは、研究者が、マス・コミュニケーションに利用され、ジャーナリズムの世界に躍らされたことである。安田氏の《日本語系統論》は、この書物に始まるものではない。レプチャ語という、一般には耳新しい言語を、引用したことを除けば、やはり、これもベスト・セラーのひとつに数えられる『人間の歴史』において、既に採られた方法——正しくいえば、方法以前だが——が、ここにも、そのまま、適用されている。むしろ、『人間の歴史』の好評に、自信を抱いた著者と出版社とが、『万葉集』という、著名な具体的作品の言語を、好奇心を惹き起こすレプチャ語といった珍らしい言語で解明する、《画期的》な事業を企画させたのであろう。ところで、『人間の歴史』のときには、正面から、これを批判した学者は、ぼくの知る限り、なかったように思う。『万葉集の謎』に至って、専門家の話題になったのは、新聞や週刊誌などのジャーナリズムが、煽ったからである。蚊は、ボーフラのときに殺しておかないと、処置に窮することを、専門の学者たちは、忘れていた。『人間の歴史』も、随分と売れたのだから、叩くなら、このときに叩くべきで、既にその機を失した以上、黙殺すべきではなかったか。こうした熱病的ブームは、短期間のうちに、消滅するのが常だからである。この騒動で、専門家は、行司の差違えが、翌日の報導写真で明らかにはなったけれども、負け角力に終った力士のような、ツ

マラない立場を、出ることができなかった。大野晋氏の誠実な批判は、著者にとって、〈カワズのつらに水〉であったし、わずかに、金田一春彦氏の戯文が、痛烈な揶揄となって、《謎》解きの荒唐を、世間に納得させたに過ぎない。結局は、当時の新聞広告にも認められるごとく、この書物に対する世人の興味を、ますます昂揚し、出版プロデューサーを自任する発行者に、利用されることとなった。今年になって、このブームが、漸次、下火になったのは、ただに、啓蒙が効を奏したからというよりは、いわゆる《新書版》全般の売行き減退とか、ベスト・セラーを追う人びとの移り気に、多くの原因を、求めねばなるまい。

要するに、専門学者は、著者や出版者をも含めての民衆に、話しかけ、説得する能力に欠けていたのである。一方、安田氏は、性生活の調査や、産児制限の指導では、ぼくなどの生まれる前から、当局の弾圧と闘ってきた先覚者である。出版の神吉氏も、民衆の嗜好を察して、連続的にベスト・セラーを発行している。しかも、その一冊の書物を纏めあげる努力は、大変なものらしい。安田氏の著書『人間の歴史』や、訳著『風俗の歴史』は、ともに、尨大な量であるが、いろいろの層の人びとから意見を徴して、数度の改稿を重ねなければ、印刷しないと聞いている。こうした努力が、民衆を相手とする出版物に、なされるところに、ベスト・セラーの実現する大きな理由がある。作為的に湧きあがるブームである、という批判もあるけれども、決して、それだけのものではない。しかるに、専門の学徒は、民衆に悪える啓蒙ということを、とかく安易に考えすぎているのではあるまいか。

学問を、《象牙の塔》に閉じこめることも、ぼくは、ひとつの見識だと思う。そういう学者も、あってよい。しかし、学問を、閉鎖的な社会から解放して、民衆に奉仕させることに意義を認めるなら、——学問を、何らかの意味で、民衆と接触させようとするのなら、啓蒙ということについて、根柢的に考えなおさねばならないであろう。

たしかに、昨年は、一般の関心が、国語に向けられたとしであった。NHKの国語講座が始まったし、『講座日本語』や『ことばの講座』が出版され、相当数以上の聴取者や講読者があったと聞く。また、週刊誌や新聞の《ボナンザ・グラム》——推理作文——は、異った年齢や社会の層を通じて、当用漢字や現代かなづかいを、普及したこと、どんなに優秀な教師も、及ばないほどであった。だが、しかし、これらの人びとの絶対数が、どれだけ多かったとしても、日本人全体からすれば、やはり、わずかに違いない。とすれば、やはり、問題は残る。

東京創元社の講座は、対象を、〈義務教育修了程度〉としたそうである。この方針は、立派である。しかし、この《程度》が、具体的に、どう把握されていたのか、執筆の方がたに、質問してみたいところである。かれらの《程度》の実際について、どれだけの資料があり、どう理解してよいのか、そして、それに応ずる講座が、なにを、どれだけ、どんなふうに書かれるべきか、実証的に明示されているのであろうか。その大部分が、かれらに接触することのない執筆者個人によって、それぞれ、主観的に想定されているに過ぎないのではあるまいか。

民衆とはこんなもの、——といった主観的判断によってのみ、啓蒙が、なされて来たように思われる。啓蒙について、はっきり

した認識を欠くところに、専門の研究者が、その善意にも拘らず、ジャーナリズムに利用される原因がある。

こうした啓蒙の不徹底乃至失敗は、ぼくたちの研究のあり方にも、大きな反省を与える。たとえば、戦後の国語教育は、〈読む〉〈書く〉〈話す〉〈聞く〉という、言語の研究者から見て、妥当な目標を設定した。ところが、現実には、〈書けない〉〈読めない〉〈話せない〉〈聞けない――聞いてもわからない〉生徒を、夥しく送り出している。なぜか・目標は妥当であるけれども、目的が明示されなかったからである。この問題は、別の機会に詳述したいが、目的の曖昧にされたのは、言語の専門的な研究が、目標を与えることはできても、目的を示し得なかったからであると考える。言語を、〈読む〉〈書く〉〈話す〉〈聞く〉行動として把えたことに、間違いはないとしても、言語は、それだけではない。〈書く〉〈話す〉に至る過程、〈読む〉〈聞く〉によって生ずる過程に、それぞれ、支えられる四つの行動であることを、看過していた。看過しないまでも、切り捨てて顧みることがなかった。だから、言語という道具の機能や使用法は、明らかになったが、何のためにそれが必要なのか、学問的に明示されなかった。支えるものと支えられるものとの関係において、言語を把握しなかったところに、ぼくたちの研究が、とかく、《記述学》に傾き、たまたま《説明》の域に足を踏み入れると、方法論的追求を欠く主観的説明でなければ、歴史的社会的条件を無視した原理的説明に、終らざるを得ない結果となった。こうした、ぼくたちの学問の欠陥が、啓蒙の面で、露呈したといえる。ぼくたちは、国語学的な知識を与えることしかできないのであって、なぜ、その知識が正しく、その知識が必要なのか、ということになると、学問的な裏づけをもって、殆んど確言することができない。

こうした事実に対する理論的な反省は、まだ、なされていない。しかし、文体論に対する関心が、頗る高まって来たことは、在来の考え方の行き詰りに対する、実践的な打開を試みようとする気運の、生じたことを意味しよう。ただ、それが、未開拓の分野において、理論としてでなく、実践として具体化されたところに、対象の規定とか方法の追求とかで、問題は、今後に残されている。たとえば、文の長短・品詞の表われかた・文の断続の仕方、といったものは、客観的な事実であるとしても、そうした客観性が、研究者の判断と、なぜ結びつくかを、検討し、追求しなければ、《無手勝流》の危険を胎むことになる。国語研究の質的な発展が、方法論上の《無手勝流》によって、とかく妨げられて来たことからすれば、この新しい分野の開拓には、それが、よりこうした欠陥の生じやすい分野であるだけに、慎重な自己批判が必要であろう。しかし、こうした意欲的な気運の発生した事実は、特別に記録しておくべきであり、将来、もう少しはっきりした形をとってから、批判すべきかと思う。

ただ、ここには、京都大学の国語研究が、ひとつの頂点に達したことを示す意味で、遠藤嘉基博士の『貫之の「文体と表現意識」――土佐日記の文章を通して――』（京都大学文学部五十周年記念論集）について、触れておきたい。これは、土佐日記には、訓点語と仮名文学語との二つの文体が交流しており、訓点語が、微苦笑を誘う表現効果を期待して用いられているとするところに、

眼目がある。紀貫之の散文に、訓点語と仮名文学語とが、混淆することは、既に、古今集仮名序について、築島裕氏の明らかにされたところである。遠藤博士は、更に、両者を、作者の表現意識において位置づけられた。

一体、京都大学の国語研究の系譜は、大別して、《国語派》と《言語派》とに分けることができよう。詳しい説明は、ここには述べないが、国語派は、吉沢義則博士にはじまる。言語派は、新村出博士から出るが、実際には、昭和十年代から、具体化したといえよう。吉沢博士の退官は、昭和十一年で、昭和十三年には、橋本進吉博士が、出講された。大体、この前後に、言語派が、国語派に対するアンチ・テーゼとして成立した。言語派については、しばらく措く。吉沢博士は、鋭い直観と深い洞察とによって、開拓者としての基礎を築かれた。たとえば、訓点資料の国語学的価値を発見されたのがそうであるし、また、ひとつの作品において、雅語と俗語との区別が識別できることを、指摘されたのもそうである。だが、それは、優れた博士の資質と読みの深さから来る発見であって、実証が、必ずしも、これに伴わなかった。実証を怠られたわけではないが、実証と結論を結びつける原理が、博士の学識以外になく、客観的な説得力に欠けることが、少なくなかった。そこで、博士の後継者たちは、これを、実証によって、確認しようとした。ひと頃、京都大学の学風を示すとされたが、体系や概括をむしろ抛棄して、著実な具体的実証を求めたわけである。研究は、微に入り、細を穿つというふうに、精密、周到に進んだけれども、それが、無前提に処置された結果、作業のための作業と化する傾向がないではなかった。遠藤博士は、この展開を受けて、それらの作業によって得られた結果の位置づけを試み、相互関係を明らかにして、体系化をはかられたわけである。この営みは、数年前、『訓点資料と訓点語の研究』においても、別の意味で試みられた。すなわち、訓点語を、国語一般のうえに、位置づけようとされたわけである。この意義は、不幸にして、理解されず、〈毛を吹いて傷を求める〉批評しか、公けにされなかった。そのために、これを、方法論的に克服する研究は、絶えて現われない。

遠藤博士の体系化は、しかし、検討すべき余地がないわけではない。訓点語が、土佐日記において、微苦笑を誘う効果をねらったものであるとして、そのことは、やはり、訓点語と仮名文学語とを混用する古今集仮名序に、適用することはできないであろう。とすれば、見解の相違に終る危険性を胎むといわねばならない。これは、訓点語というものが、紀貫之たち乃至宮廷貴族において、どんな位置を占めていたかという、社会的配慮を欠くからである。そうした背景において、微苦笑の効果が把握されるときに、微苦笑を誘わない上奏文の訓点語と、矛盾することなく、理解できるに相違ない。

それはともかく、従来の個別的な実証が、体系化される気運を生み出したことで、注目すべきであり、これを、克服するところに、未踏の山頂が、望見される。社会的配慮によって、歴史的展開の相を跡づけることが、国語派の、第二の目と標なろう。

小島憲之氏の『上代人の文章―神武紀を中心として―』（国語学第二六集）は、口誦的伝承が、文字に定着される方法について、

理論と実証とから追求したものである。そのなかでの、〈耳で聞く「聴き手」には語られる刹那刹那がその理解を助けるのであって、その時その時に聞く我が耳に矛盾さへなければ、全体としての矛盾不合理は別に問題とならなかった。眼で見る不合理も耳の場合はさうではないのだ。〉という発言は、まさに、卓説であって、話し手についてもいえるであろうし、また、目が耳から独立するのが、遙かに後の近代であることからすれば、日本語の膠着語的特質と相俟って、物語や軍記物の文体、さては、日本語の文法論的考察においても、こうした見地から、再検討を要する問題を、示唆するといえよう。これに共通する見地に立脚する個別的な研究は従来も、ないわけではないけれども、理論的な裏づけや、扱い方の方法論的検討は、まだなされていない。そのために、とかく、解釈のための技術の域を、出ることができないでいる。

科学は、一般に、対象を仮設する。この仮設を証明するのが、自然科学では実験であり、文化科学では実証である。ところで、実験は、繰りかえして確認することができるけれども、実証は、そういうわけにはいかぬ。そこで、実証が仮設の裏づけをなすためには、哲学に支えられねばならない。国語研究一般を概観して、最も痛感するのは、哲学の貧困である。実証が、単なる実証に終るならば、それは作業であり、実証が、無前提に証明の材料とされるならば、それは、もはや、証明ではなくて、思いつきでしかない。国語研究者が、哲学を研究しなければならない、という理由はないが、国語研究者も、やはり、哲学を持たねばならぬ。でなければ、国語という、一見、扱いやすい対象を持つがゆえに、他の学問に比して、いたずらに、業績の量だけを誇ることになりかねない。基礎的な作業は、もとより尊重せねばならぬ。問題は、作業と研究とを、混同したり、両者を安易に結びつけることである。こうした厳正な学的反省の欠乏は、啓蒙を安直に片づけることと、ウラハラをなすことが多いように、認められる。

こういったことは、今にはじまったことではない。だが、国語に対する関心が、一般に湧きあがって来ているのを機に、研究と啓蒙とのあり方を、改めて、検討する必要があろう。このことは、研究者が啓蒙家であらねばならぬかどうかとは、別のことである。

時枝誠記博士の『現代の国語学』についても、一言、触れておかねばならない。しかし、この書物については、『国語学』（第二九集）に、浜田敦氏の適切穏当な書評があって、異見を挟む余地がない。ただ、浜田氏は、〈批評されるもののための批評〉の立場から、述べておられる。〈批評するもののため〉の見地から少しく触れよう。

各方面からの批判はあるにしても、《時枝学説》の与えた影響は、極めて大きいし、今後の研究は、《時枝学説》を、無視したり回避したりしては、進められないと思われる。ところで、従来は、日本の後進性がそうさせたわけだが、学説を摂取したり批判する場合、学説そのものを取りあげて、その学説の学史的位置づけや、学説の成立する事情には、ほとんど、考慮しないのが、むしろ普通であった。

ところで、時枝博士が、ソシュールをはじめ他の学説を批判されるときに、その立場からのみ、解釈しようとされる傾向の強いことは、多くの人たちの指摘するところである。そして、それは、

時枝博士のされる理解や批判が、公正さを欠くという結論となる。それは、それでよい。だが、時枝博士が、ひとつの学説を提唱されることからすると、このことは、《時枝学説》を理解するうえで、非常に役に立つ。すなわち、他の学説が、歪められているとしても、それが——その歪められた形が、《時枝学説》を成立させ、発展させた土壌であることは事実であり、《言語過程説》の形成される過程を辿るときに、さきに刊行された『国語研究法』とともに、有益な資料となろう。

高橋太郎氏の『「場面」と「場」』（国語国文二六五号）は、さきに公表された永野賢氏の考えを、継承し、展開させたもの。〈客観的立場における場面〉を、《場》と名づけたことは、今後、広く一般化されてよい。圧縮された記述のためか、ぼくのようなものには、よく理解できないところがある。たとえば、《場》の構造を、四極と考えられたのが、水谷静夫氏の意見で、三極とされたことなど、もう少し詳しい説明がほしかった。また、《場》と《場面》とを区別することによる、言語発達の様相には触れてあるが、言語通達の様相についても、その見解を知りたいものである。また、従来の《場》乃至《場面》の研究は、これらが言語表現を規定する条件として考察されて来た。更に、言語が、これらを規定するということについても、検討が、施されるべきではないかと思う。これらの相互関係を追求することは、言語の通達や発達だけでなく、歴史的な発展を辿るうえでも、看過できない。こうした、殆んど未開拓の分野を究明するに方っても、基礎的な理論として、この研究は、有効な示唆を与えることが、予想される。

時枝誠記博士の『言語における伝言者の立場について—祝詞・宣命における「衆聞宣」の訓義に及ぶ—』（国語学第二七集）は、伝言者を媒介とする祝詞や宣命が、伝言者の傍観的な、天皇の意向の説明といった形式に立つことから、素材的事実を、敬語的表現で扱うので、〈衆聞宣〉の〈宣〉は、〈ノタマフ〉〈ノリタマフ〉と訓むべきだとする。ぼくとしては、まったく同感で《場》や《場面》の研究は、古典の言語形態やその解釈に、新しい局面を展開させるに違いない。ただ、問題は、《場面》や《場》を、具体的に、どう把握するかにある。祝詞や宣命の場合は、比較的単純であるが、王朝仮名文学作品になると、相当に厄介となろう。時枝博士を含めて、多くのひとは、心理の内省に立脚されることが、少なくないけれども、これは、往々、歴史的乃至社会的条件の特殊性と、それに対応するパーソナリティの独自性とを、看過することとなっている。《場》および《場面》の、基本原理を追求するとともに、それらを具体的に認識する方法の検討も、そろそろ、なされてよい時期になっているのではあるまいか。

資料の翻刻・語彙の編集・索引の公刊が、次第に、数を増して来たのも、よろこばしい。かつて、校本万葉集と万葉集総索引が刊行されて、わずかばかりの疵は免れなかったけれども、万葉研究が、飛躍的に発展したことを想起する。資料は、万人の公有となったときに、はじめて、近代的な学問が進歩する。その意味で、一昨年に引きつづいて、こうした基礎資料の出版が営利を外に、著々と行われていることは、今後の研究に、大きな効果を齎

すに相違ない。殊に、訓点語のような、一部の特殊な人たちにだけ利用されているものは、既に紹介されている資料についてだけでも、その索引の公刊が待望される。

なお、泉井久之助博士の『言語の研究』は、広い視野に立った深い研究であり、教えられるところが多い。ただ、最近数年間に発表された論文・評論・随想の再録であり、纏められた事実を指摘するに止どめる。

国語学史

近来、国語学史の研究は、まったく振わない。量的には無論、質的にも、瞠目すべきものが、さっぱり出ない。かつて、時枝誠記博士は、言語意識の変遷という観点から、国語学史を記述された。これは、学者や学書の解説に終始していた、従来の文献学的学史に対する批判であり、その克服であった。ただ、時枝博士の学史は、言語意識を、時代的社会的条件において把えなかったために、その変遷の相を跡づけることはできたけれども、これを、歴史的な展開として認識するに至らなかったと思われる。このことが、博士の国語学にも、ひとつの弱点を胎むこととなり、時には〈国学者の亜流〉〈神がかり的学者〉と、某俗流人名辞典が、誤解するようなことにもなったのであろう。時枝学説を理解し、批判するためには、西洋言語学の摂収され方を検討することも、大切には違いないけれども、その国語学史についても、究明する必要がある。そして、両者に共通することは、過去の学問を、歴史的な座標において把握していないということであろう。

最近、《時枝学説》をめぐる論争が、活潑化しようとしている。その考察は、今年の展望を担当するひとの課題だから、いまは、述べない。ただ、賛否のいずれを問わず、時枝学説を無視しては、現代の国語研究が成りたたないとすれば、単に、国語学史それ自体の究明のためだけでなく、そのためにも、新しい国語学史が、構築されねばならない。

無論、このことは、たとえば、竹岡正夫氏の『「よそひ抄」の成立について――新資料「よそひ抄カ行の部」の発見――』（国語と国文学第三八七号）のような、文献的基礎研究の価値を、軽視するものではない。ただ、基礎的研究であっても、全体的な学史に対する方法論を、背後に欠けば、《作業》になってしまう。《作業》も、また、それ自体の意義を持つことは、否定しないけれども、ぼくたちが、《研究》者であろうとするかぎり、そこに停滞することはできない。

時枝博士の『国語学史』は、単行本になってからでも、二十年に近い歳月を経過している。そろそろ、新しい観点に立つ国語学史が、出現してもよいのではあるまいか。戦後の歴史学の発展には、目ざましいものがある。国語学史の研究と歴史学との関係を、肯定的に結びつけるか、否定的に断ち切るかは、別としても、やはり《史》である以上、史学の方法と成果とに、一度は、対決して、究明する必要が、あろうと思われる。そして、ぼくたちの国語研究も、他の文化的営為と同じく、歴史的展開のうえに、伝統を履まえながら、これを克服して行くところに、著実な発展を開拓し得るとすれば、これは、なおざりにできない課題のひとつである。

――大阪市立大学講師――